

なぜか幸せな心臓手術 ⑥

高橋 一郎



映画監督でありCOMLのボランティアメンバーでもある高橋一郎さん。

昨年心臓の大動脈弁置換術を受けられたのですが、
そのご経験について「**すごく幸せで、病気になってよかった**」とおっしゃっていました。
その体験を連載で綴っていただいています。

● 夜のCICU

手術を受けた日の夜、私はCICU(心臓疾患集中治療室)のベッドのうえで夢うつつの状態だった。とにかく眠いのである。眠くて眠っているのだがときどき意識がもどってくる(これがレム睡眠の状態なのだろうか)。夢をたくさん見たように思うがさっぱり思い出せない。夜中に交代したg看護師が小声で何度も声をかけてくれる。私は聞こえているのだが反応ができない。いわゆる金縛り状態だ。彼女は何度も枕元にきて点滴やほかの計器の見守りをしていた。ほかの患者のところへ行ったりかと思うとまた帰ってくる。手術直後の患者ばかりだ。看護するにもとりわけ緊張が強いられることだろう(これは大変な仕事やな、と眠りのなかで思っていた)。同じ部屋に赤ちゃんの患者が数人いるようだ。あちこち泣き声が頻りに聞こえてくる。生れたばかりなのにほんとうに気の毒なことだ。泣き声を聞いているとこちらが泣きたくなってくる。

● 手術から2日目

朝6時、目が覚めた。とても気分がいい(え?手術したのに、何で……)。心臓を止めて手術したなど自分でも信じられない。まったく痛みがない(ウソみたい)。モルヒネが効いているのか? 一体私はどんな格好になっているのだろうか。f看護師が前日に見せてくれた例のイラストを思い出してみる。確かにからだじゅうに管が入っている感じが実際にあちこち見ることができない。g看護師に「すみません、鏡ありませんか」と頼んだ。「私のでよければ」と小さな手鏡を貸してくれた。鏡が小さいのでからだの全体像は分からない。顔から胸、腕、腹、脚、そして周りの機材を順番に見ていく。イラストは正しかった。

朝ごはんが出た。g看護師がベッドごと私のからだを起こしてくれる。お粥、味噌汁、野菜の煮浸し、リンゴ、牛乳が並んでいる。リンゴを最初に食べた……美味しい! 甘みと水分のありがたさ。こういうときの果物は

値千金に思える。あとのものは少し箸をつけた程度(さすがに食べられなかった)。

レントゲンを撮るといっているので、どうやってレントゲン室までいくのかしらと思っていたら、撮影機の方からベッドへやって来た。びっくりした。ベッドに寝たままレントゲン撮影をしたのだった。椅子型の体重計に座って(もう椅子に座れる!)体重を測ると63.5kgある。通常の体重より2kg以上多い。手鏡で顔を見るとむくんでいるのがわかる。水分を出す必要があるということで利尿剤を飲んだ。

寝ているより椅子が楽だったので、昼食は椅子に座って食べた(といっても食べたのは少しだけ)。それにしても薬というのはすごい力があるものだ。昨日胸を開いて手術をしたというのに、もう椅子に座ることができるのだ。

受けた手術について思いを巡らせた。といっても手術中のことはもちろん何も覚えていない。心臓を止めていたのは70分ということだった。心臓を止めるということだったので、ひそかに期待していたことがあった。ひょっとして臨死体験はできないだろうか……、と。もし臨死体験ができたなら、幽体離脱したもうひとりの私が手術室の天井へフワフワとあがっていく。天井の高みから私は部屋を俯瞰(フカン)する。そして胸を開いた私を見る。口には人工呼吸器が入り、おまけに経食道心臓エコーのカメラ(太い蛇のような)も入り込んでいる。人工心肺や諸々の器械、計器が私につながっており、たくさんのスタッフが私を取り囲んで仕事をしている。そんな光景を見ることができないだろうか……と。もしそんな体験ができたなら後で「僕は臨死体験したんやで!」とみんなに自慢できるのになあ、と(アホな想像をしていたもんだ)。

● 病室へ帰る

利尿剤を飲んだがオシッコがあまり出ていない。朝より顔が丸くなっている。オシッコ出てほしい、などとぼんやり考えていたらベッドを空けることになった。急患が

来たのだそうだ。車椅子を押してもらい病室へ移動した。手術後二日目でCICUを出ることになったのだった。

夕食は病室で食べた。トマト味のグラタン、スープ、ピクルス、ご飯。「どれ食べてもしっかり味を感じますね」と近くにいたd看護師に話すと「久しぶりに食べるからでしょう」と彼女が答えた。なるほどと思う。昨日は朝から飲まず食わずで手術を受けた。今日は朝、昼と食事は出たがちょっと口をつける程度だった。たった二日間だが普段の暮らしでこんなに食事の時間をあけることはまずない。「久しぶり」という言葉が感覚的にはピッタリしている。今回は完食した。おいしかった。それを見てd看護師は生理食塩水の点滴を外した。寝る前の体温は36度9分、少し熱っぽい感じがした。

●手術から3日目

朝から体温37度3分と少し熱がある。頭がボンヤリしている。大便を試みるが出ず。洗髪してもらってからレントゲン検査をした。心臓が水分で少し大きくなっているらしい。利尿剤を入れてオシッコを出さねばならない。不整脈も出ているということだ。胸につないだペースメーカーを動かすと胸に埋め込んだ電極がピクピクと反応する。何やらこそばゆい感じた。新しい点滴も始まった。

h看護師の話ではベッドで座る姿勢にすると横隔膜が下がり、水分が循環しやすくなる。寝るときは枕を少し高めにするのが良いそうだ。今日は大便に3度の挑戦をしたが出なかった。眠る前の体温37度7分。からだは熱く感じる。夜中はこの熱で辛かった。何度も目を覚まし、何度も眠った。利尿剤を飲んでいたので何度も尿瓶を使ってオシッコをした。

●患者の権利…

寝てるのか、覚めてるのか、意識がトロトロしているところへブツブツという声が聞こえてきた。隣のベッドのおじさんPが担当看護師と何やら話をしている。「オシッコは自分でトイレへ行っていたい」というのがおじさんPの言い分らしい。「ふらついておられて危険ですから尿瓶でしてください」と担当看護師は説得している。「途中で倒れたら大変なことになりますのでね」「いやや、わしはトイレでしたい言うてるやろ。これは患者の権利や」(それは違うで、おじさん)。トイレは確かに人の尊厳にかかわることではある。しかしそれも場合によるやろ。「婦長を呼べ!」とおじさんPの声が段々大きくなってきた。困った担当看護師が婦長さんと呼んだらしい。「Pさん、いろいろ申し訳ありません」と婦長さんはまずお詫びのような挨拶をした。「お気持ちはよくわかるんですが、いまのPさんの状態ではトイレに行っていたく

のは危険ですのね……」と説得にかかった。(おじさん、こちらは熱でからだ重いんだから、静かに寝かせてくださいよ)とか思いながら寝返りを打つと出血に気がついた。胸に入っている電極のところから出血してシャツに滲み出しているではないか。ナースコールを押し、事情を説明する。当直の医師が来て処置してくれた。

●手術から4日目

朝から隣のおじさんPがまたごねている様子だ。昨夜のトイレがハミガキに変わっただけである。担当看護師は「倒れると危ないのでベッドでハミガキをお願いします。お手伝いさせていただきますので」と話している。「いや、わしは洗面台でしたい」とおじさんPは主張する。しまいには「人権侵害や、訴える。こんなひどい病院やとは思わなんだ」とまた声が大きくなった(おじさん、勘弁して!)

私は大便が出なくて困っていた。普段は便秘など経験したことはない。いまの状態は便秘とまでは言えないだろうが、やはり気分がすっきりしない。「座薬を使ってみます?」とd看護師が提案してくれた。なるほどその手があったか。やってみよう。トイレに入って座薬を入れ、じつとがまん。しばらくして薬の効果がでてきた(ヤツタ!)。「大便出ましたよ」とd看護師に報告すると彼女はにっこり笑ってVサインを出してくれた(こういうときのあなたの笑顔、ほんとうに励みになります、ありがとう!)

●まさか……

昼食後眠くなり、熱っぽい感じがして何もする気が起きない。ベッドでうつらうつらしていたが、あまりにしんどいのでナースコール。血圧を計ってみると上が87まで下がっていた(しんどいはずです)。こんな血圧は初めての経験だった。E医師が心エコーを撮りにベッドまで来た。続いて心臓の周囲に水が溜まっていないか確認するためにベッドのままCT室へ。結果、しばらく様子を見るが「場合によってはもう一度胸を開くかも知れません」(え!)。部屋に帰ってくるとおじさんPのベッドが空いている。退院したそうだ(ヨカッタ)。夕食前にE医師が来て再度心エコー検査をした。「水は増えてませんが、ひょっとして何らかの出血があって心臓を圧迫しているのかも知れません。もしそうなら再度手術しますのでいまから食事と水を摂らないでください」。しんどくて頭がボンヤリしているし、楽になるのなら何とでもしてください、という気分だった。

長い夜になりそうだ。まだ20時を過ぎたばかりである。寝てるのがしんどくてベッドに座った。足を床につけてため息をついた。それにしても……また手術?

(つづく)